

アブラナ科植物根こぶ病菌の病原性と病原力の多様性

(本文1ページ参照)



口絵① アブラナ科雑草根こぶ病。上からタネツケバナ、ナズナ、スカシタゴボウ。

口絵②上 タネツケバナ根こぶ病菌接種カブの罹病根。(品種‘金町小かぶ’)

口絵②中 スカシタゴボウ根こぶ病菌接種カブの罹病根。(左 無接種, 中 スカシタゴボウ菌, 右 ハクサイ菌)

口絵②下 スカシタゴボウ根こぶ病菌 (口絵②中と同一個体群) を接種したカブの縦の亀裂を伴い不完全な肥大を示す罹病根。(口絵②中下 品種‘白盃’)



口絵③ タネツケバナ根こぶ病菌接種ハクサイ (品種‘野崎二号’) の罹病根 (左: 無接種, 中: タネツケバナ菌, 右: ハクサイ菌)。

(続き)



口絵④左 タネツケバナ菌根こぶ病菌接種ハクサイにおける植物体地上部の生育抑制。



口絵④右 タネツケバナ根こぶ病菌接種ハクサイの不完全な肥大を示す罹病根 (品種 '空海 70')。

田中秀平氏原図

セジロウンカの飛来時期とイネの移植時期からみた イネ南方黒すじ萎縮病の発病リスク

(本文 43 ページ参照)



口絵① イネ南方黒すじ萎縮病による株萎縮
注) 中央の2株が発病株, 左右は健全株。
中央の2株は成熟期までに枯死した。

口絵② イネ南方黒すじ萎縮病により部分的な茎が萎縮した株
注) 白線で囲んだ箇所が萎縮した部位を示す。
萎縮症状とともに葉色が濃く, 同一株の別の茎は正常に生育して穎花も観察されるが, 萎縮した茎からの出穂は認められない。



松比良邦彦氏原図

カボチャ果実斑点細菌病の生態と防除

(本文 32 ページ参照)



口絵① 苗の子葉と本葉の縁に病斑が認められる。



口絵② 葉の縁や葉脈の周辺に病斑が多い。



口絵③ 蔓に認められた楕円形の病斑。



口絵④ 開花前の感染によって幼果に微小な斑点が認められる(矢印)。



口絵⑤ 開花後の果実には病斑を中心とした突起症状が認められる(矢印)。



口絵⑥ 収穫後の果実に認められた突起症状。

冬期のマシン油乳剤散布によるチャ赤焼病の発病助長とその対策

(本文 47 ページ参照)



口絵① マシン油乳剤のみ散布

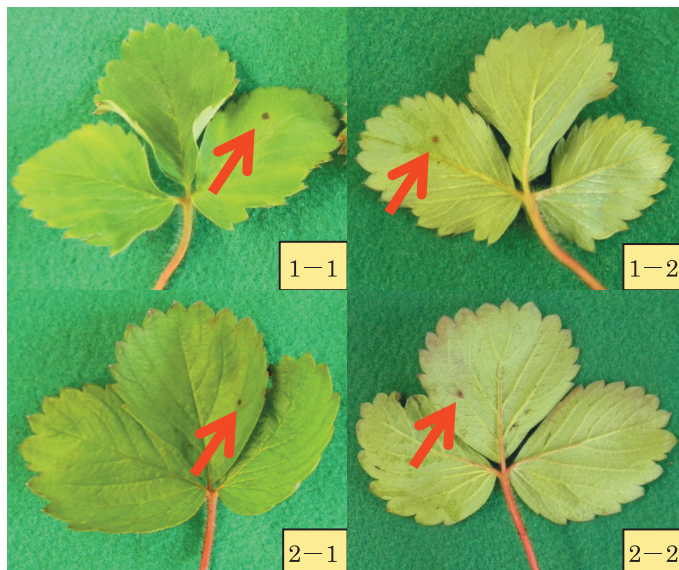


口絵② 塩基性硫酸銅水和剤散布後にマシン油乳剤を散布

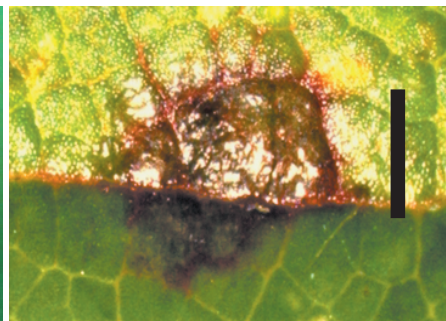
吉田克志氏原図

イチゴ小葉の炭疽病による赤色小斑の発生と防除対策

(本文 53 ページ参照)



口絵① 現地で採集した赤色小斑を有する小葉 (2014)
品種「紅ほっぺ」, 同一葉で 1-1, 2-1 が葉表, 1-2, 2-2 が葉裏。
赤色小斑の発生位置 (葉表裏で左右対称となっている)。



口絵② イチゴ炭疽病菌の接種試験で発見した赤色小斑 (2013)。品種は「紅ほっぺ」。
右は拡大写真 (スケールバー: 1mm)。

奈尾雅浩氏原図